

意識は「同じ」を繰り返す。一般向けの講演で、そんなことをいうと、あとでサッパリわかりません、といわれる。

「同じ」と「違う」は、等価ではない。そういつても、似たような反応が返ってくる。なんのことや、わかりません。そういわれるのである。学生に上のような内容の講義をしてみると、なんだか怒っている。どうして怒るのかと思ったら、言葉の定義がわからないという。「等価」とはなんだという。言葉をきちんと定義してから使ってください。そんなことをいう。

言葉を定義してから使うものと思っている。言葉は生きもので、前後の文脈から、その場の雰囲気まで含んでいる。サヨナラという言葉だって、職場を出るときに使えば、明日はまた会うという軽い使い方である。しかし恋の終わりにこの言葉が発せられるなら、はるかに重い意味を持つてしまう。簡単に定義できるような代物ではない。

それより、ちゃんと説明を受ければ、わかって当然という、その考え方が気になる。数学の問題を解いた経験があれば、すぐにわかるはずである。先生や友人に問題の解き方を教わったら、すぐに忘れてしまう。自分で苦勞して解けば、もはや決して忘れはしない。何十年か後になっても、同じ問題をまた解こうと思えば、たいてい解ける。そもそも解けるという自信があるから、当然解けるのである。

それと同じで、むずかしいことに出会ったら、自分で考えればいい。解けるまでに時間がかかるが、いったん解ければ、応用まで利く。関連の問題など、なんなく解けてしまうのである。そんなことは、多少とも数学を勉強した人なら、はっきりわかって

いるはずである。数学でなくても、論理的な事柄なら、どれも同じである。

いまの人は、面倒なことを考えるのが、好きではないらしい。毎日仕事で忙しいから、ゆっくり考えてなんか、いられないのかもしれない。しかし、いくら忙しくても、一つの問題を頭のなかに置いておいて、ときどき取り出しては、それについて考えることはできるはずである。私も決して暇ではない。だから、じつはそんなふうにしてものを考える。なかなか答えが出ないが、出たときはじつに嬉しい。その嬉しさが味わいたくて、考えているようなものである。

二年前、たまたまプーケットのホテルに滞在していた。友人が来るまで、三日ほどあった。その間、たった一人である。長年気になっていた問題を、そこで朝から考えた。なんと三日で、ほとんど答えが出てしまった。朝は早くから目が覚める。向かいがお寺で、お坊さんが早起きをして庭を掃いている。鶏の音がうるさい。それで目が覚める。そのまま考え出して、その筋道をパソコンで書いていく。そうしたら、三日で本の三章分が書いてしまった。

長らく考えていた問題だが、ゆっくり時間が取れたのがよかつたらしい。わずか三日で全体がまとまった。それを思うと、忙しいばかりでは、むろんよくない。しかし忙しいときに、その問題を考えていたという土台がなければ、空いた時間が三日あっても、答えは出なかったと思う。ただなんとなく、三日が潰れてしまったに違いない。

考えることを習慣にするのが大切であろう。私が好きなモンテーニュの言葉にある。習慣は帝王である。それによってなし得ないことはなにもない。

考える方法



養老 孟司

ようろう・たけし——1937年、鎌倉生まれ。東京大学医学部卒。医学博士。81年より東京大学医学部教授。解剖学専攻。95年退官し、96年より北里大学大学院教授。「からだの見方」（筑摩書房）でサントリー学芸賞受賞。著書に「唯脳論」（青土社）「人間科学」（筑摩書房）「バカの壁」（新潮社）ほか多数。

